滋賀県　死生懇話会

インタビュー　シリーズ

「おかえり」
ＮＰＯ法人好きと生きる

八田典之　代表理事
山崎史朗　代表理事
山崎雄介　代表理事

取材日　２０２０年１１月１４日

左より、八田さん、山崎雄介さん
山崎史朗さん

僕らの人生は「出会い」と「好き」が転機。活動を通して「きっかけ」の種まきができたらいいな。

誰でも参加できる居場所「おかえり」を運営されているＮＰＯ法人 好きと生きる代表理事の八田さん、山崎史朗さん、山崎雄介さんからお話をお伺いしました。

新型コロナ感染症の影響で、取材当日は、オンラインにより「おかえり」を運営されていました。

※ＮＰＯ法人 好きと生きる
「好きなひと・好きなもの・好きなことと共に好きな地域で生きる」をテーマに、生きづらさを抱えた人や、不登校の子ども達の居場所づくり等の活動をしているＮＰＯ法人。

この活動をもっと多くの方に知ってもらいくて。活動に共感してくださる方に参加してもらって、一緒に形にしていきたいと思い、ＮＰＯ法人を立ち上げました。

Ｑ「ＮＰＯ法人好きと生きる」を立ち上げるに至った経緯は？

八田さん　僕たちは不登校をきっかけに出会い、遊びの中の一つとしてバンドをはじめました。それからプロミュージシャンを目指すようになり、ずっと音楽活動をしています。それで、１０年ぐらい前に知り合ったある校長先生が「先生たちが集まる研修会で、不登校の経験を語ってくれないか」ときっかけをくださり、それから、不登校の経験を語り、またその経験から生まれる楽曲を演奏する講演ライブスタイルで、たくさんの学校をまわる活動が始まりました。

ＮＰＯ法人を立ち上げた理由の一つは、この活動をもっと多くの方に知ってもらいたかったからです。もう一つの理由は、3人ともやりたいことがたくさんあるからなんです。これまでも、活動の中で出会った仲間たちと一緒に手探りで色々とやってきました。今日見てもらった居場所づくり「おかえり」もそうですし、不登校の子ども達の居場所「にじっこ」も。

こういった居場所を必要としてくださる方が増えて、どうすれば一つ一つの活動を大切に継続していけるだろうと考えたときに、やっぱり応援してくださる方が必要だと気づきました。活動に共感してくださる方に参加してもらって、一緒に形にしていきたくてＮＰＯ法人を立ち上げました。

「特にルールを決めない」というルールを決めていて…。「楽しい」を分け合う空間をつくりたくて。

Ｑ「おかえり」はどういう活動ですか？

山崎（史）さん　誰でも、気が向いた

ら来てもいいよっていうスタイルで「おかえり」は開けています。生きづらさを抱える人の居場所みたいな感じで掲げてはいますけど、基本的には誰でも来てよくて。

自分に居場所が必要やなって思ったりとか、ちょっとそこに行ってみたいなっていう人は、誰でも、年齢も何も関係なく来てもらえるような場所になっています。

八田さん　今回はｚｏｏｍを使ったオンラインの居場所でしたけど、コロナのことがなければ、多目的ホールみたいなこところを借りて、そこにみんなで集まって、ゲームをしたり、雑談したり。あと、僕らが楽器を持っていくことが多いんで、みんなに自由に弾いてもらったり。

山崎（雄）さん　参加される方も自分の「好き」を持ってくるんですよ。みんなが自分の好きなもの、何を持ち込んでもいいんで。それで自分の行きたいところでやりたいことをやる。その楽しい時間の中で出会う人たちのつながりが、何かのきっかけになったらいいなと思っています。

「おかえり」では、「特にルールを決めない」というルールを決めていて。寝てもいいし、何をしてないとあかんとかないんです。こういう場にありそうな自己紹介の時間とかもありませんし、とにかく自由に過ごすっていう感じでやっています。僕たち自身が、強制されることがすごく嫌だったり、息苦しかったりするので、それがない、誰がいてもいいし、何をしてもいいっていう「楽しい」をみんなで分け合う空間をつくりたくて。

こういう居場所づくりのあり方も面白いなって。

Q「おかえり」はこれからもオンライン開催を？

山崎（史）さん　「オンラインおかえり」も、本来集まって開催する「おかえり」の雰囲気に近づけたくて、ゲームをやっているグループや雑談しているグループと、ｚｏｏｍの部屋分け機能を使ってやってみたり。ただ人とのつながりを感じられたらいいなという思いで「特に何もしない」っていうのをテーマに、長時間開催する計画をしていたり、色々と実験しながらやっています。

山崎（雄）さん　「オンラインおかえり」に関しては、まだまだ確定的なものがなくて、時間や内容も模索しながら「いい」と思う方を選びながら変えていっているので。

八田さん　実際に集まる「おかえり」はタイミングを見て再開できたらなっていう思いがあるんですけど、オンラインだと全国どこからでも、それこそ全世界からでも入ってもらえるんで、それはそれで新しい発見っていうか、こういう居場所づくりのあり方も面白いなって思ってるんで、コロナの影響がなくなってからも、「オンラインおかえり」は続けていきたいなと思っています。

「好き」を持って外に出ると、同じものを好きな人がいる。みんなの好きなものを互いに認め合うことができたら、優しい社会になる。

Q「好きと生きる」という名前はどういう思いで？

八田さん　バンド結成２０年のときに、これまでのことを振り返ったり、これから自分がどうありたいか考えていたんです。これまで、もちろん嬉しかったこともたくさんあるんですが、たくさん悩んできましたし、失敗や辛い経験もありました。でも、なんか納得している自分がいて、なんでだろうと考えたときに、誰に押し付けられるわけでもなく、自分で選んで、大好きな音楽と向き合ってきたからだと思ったんです。好きに生きてきたなって思いました。

そして、これからどんな風に生きていきたいかと考えたときに「好きに生きる」というのもわるくないんですが、自分が大切な人やものと一緒に、好きなことをちゃんと選んで生きていたいなって「好きと生きる」だ！と思ったんです。

山崎（雄）さん　「好きなことが見つからない」って言って悩む声もけっこうあるじゃないですか。でもそれって、僕が思うに「誰かに認められるような」ってことを前提に考えるからだと思うんです。そんな風に探すと難しくなっちゃうんですけど、結構、日常に「好き」ってあふれてて、コンビニで何飲もうかなって選ぶものも「好き」やし、テレビを見ていてこの人素敵って思うのも。

オンライン「おかえり」の様子。
「NPO法人好きと生きる」さんでは、音楽活動をされているので、リクエストに応じて歌を取り入れた自由で楽しい時間を共有。

山崎（史）さん　それで、その「好き」を持って外に出ると、同じ好きな人がやっぱりいるんですよね。自分には何もないと思ってる子どもたちも、例えばゲームをやっていて、でもそれは何も誇れるものでもないし、親にも認められない。でもそのゲームが好きなことがきっかけで仲良くなっていく子どもたちの姿を見てきました。だから、人に認められない「好き」でも、それを持って外に出たり、そこで出会えるものがすごい人生のきっかけになる。僕らもまさにそうでしたから。

八田さん　僕らも音楽を通じて、音楽が好きな仲間といっぱい出会えましたし。僕らの音楽を好きと言ってくださる方はそれこそ似た感覚を持っている人たちで、親近感を持っています。

山崎（雄）さん　「好きと生きる」って言葉を掲げていると、感覚的なものとして「いや、自分には好きなものがない」っていうプレッシャーを与えてしまうかもしれませんが、そんなことはまったく望んでいなくて。みんなが、自分の好きなものを選んで少しでも楽しい時間を増やせるといいなって。

八田さん　みんなの好きなものを、それぞれ互いに認め合うことができたら、優しい社会になるやろうな、そうなったらいいなと思っています。

山崎（史）さん　僕たちの人生の中でも、やっぱり「好き」が転機になったので、そういう可能性をみんなにも感じてほしくて。「出会い」と「好き」ですね、この２点が僕らの中できっかけだったので、それで「好きと生きる」というＮＰＯ法人にしようと決めました。

僕らも子どものときに、不登校の子ども達が集まる居場所を通じて、誰かが狙ったものじゃない中で生まれたきっかけだけで、何もないと思った人生に道ができてきたんですよ。

Q活動での思いや考えは？

山崎（史）さん　僕たちは、何か画期的なアイデアを持ち合わせているわけではありませんし、すごいことができるわけではないんですが、誰かにとっての何かきっかけみたいなものをつくれたらなと思います。なんかふわってしたもんなんですよ。

僕らも子どものときに、不登校の子ども達が集まる居場所を通じて、誰かが狙ったものじゃない中で生まれたきっかけだけで、何もないと思った人生に道ができてきたんですよ。だから僕らも今、音楽活動や居場所づくりを通じて、誰かの気持ちが少しでも楽になったり、受け取ってくれる人たちにとっての何かのきっかけをつく

れたらなと。きっかけの種まきということでやっております。

（県が実施している死生懇話会の事業について）色んな考え方と生き方があるように、その中に死に方だってある、そんな風に向き合っていたいです。それぞれの経験の中で生まれる価値観と、人の話とかを聞いてそれが合わさって、その人が導き出す答えが見えたらいいなって思うんです。一人で思い詰めると、人生が苦しいものであると思い込んでいる人は、もうそれでしかない。でもそうじゃない情報が入ってきた時に、ちょっと科学反応が起こって、ちょっと柔らかいものになったりすると思うんです。

八田さん　特に大切な人の死は想像もしたくないですよね、誰にとっても避けられないことと分かってはいるのですが、考えたくもないなって。僕は自分にとってのそれが、悲しいことにならないよう、やっぱりできるだけ人生を楽しいものにしていきたいし、納得していきたい。死を考えるということは自分の残りの生き方を考えることでもあるし、好きと生きるという考えにもつながります。

いつだって、それぞれが導き出す答えが正解だと思うのですが、史朗の言うように、僕らも一人で考え込むと、不安になったりしんどくなってネガティブな方向にどんどんいってしまうから、こうした取組を通じて様々な死生観に触れられることを楽しみにしています。

山崎（史）さん　最近、友人から夜中にＬＩＮＥで「自分がサイコパスじゃないか、もう死にたい」ってきたんです。それで夜中の２時に行って「もう死にたい、死にたい」って言ってるけど、「みんなそうちゃう？」っていう話をしてたんです。その友人も、居場所づくりの活動で見守りをしてたりするんですよ。その中で嫌な自分に気づいて「自分が怖い」っていうので。

こういう活動をしていると、人間っていうものがみんな完璧に見えてくるんですよ。見守っている人たちとか、まわりにいる大人とかって良い人しかいない。でも実はみんな自分の中に葛藤があったりとか、完璧なものがないからこそこういう活動してるんですよ。僕らもそうなんですけど、自分らに欠けているものがいっぱいあるからこそ、しんどい人たちのために何かしたいって。そういうそれぞれの本音みたいなところを、そのときに打ち明け合って。ちゃんと本音を出す場面ってすごい大事だなと。

特に今の若い子たちは「自分ってなんやろう」とか、まわりと比べて「自分なんかあかん」とかがあるんで、世界が綺麗になっていくと余計にその人たちが、自分だけがしんどい、黒いもんやって思っちゃうんで。実はこの人もこの人も黒いところがあって、すごいしんどさを抱えて生きてることを吐き出したり、見せ合うことって大事なんだと思いました。

（今の時代って）検索したら何でも出てくるんで、誰かに質問しなくてもいい時代じゃないですか。一人で情報を受け取ることで、孤独になったり、一人で答えを出したり。そんなひずみみたいなものを心配しています。

山崎（雄）さん　僕らが音楽をやっていることと、たぶん死生懇話会でやろうとされていることって似てるなって思います。僕たちも音楽を通じて、やっぱり問題提起をしていたいんです。音楽を通して自分の人生を考える、僕自身がそんな風にたくさんの音楽から深く考えるきっかけをもらってきましたから。

山崎（史）さん　アプローチの仕方が違うだけで、僕らも命をテーマに講演ライブをしているので。また、その中で大切にしていることは「答え」を提示しないっていうことです。一緒に考えようってスタイルを大切にしています。

山崎（雄）さん　それを考え続けることが、もう答えなんで。音楽で問題提起していくことを、これからも続けていきたいです。

コロナ禍の今は、オンラインでのイベントが中心ですが、「一堂に会しての居場所活動や講演ライブも、タイミングを見て再開していきたい。」

●NPO 法人好きと生きる

ホームページ
http://sukitoikiru.com

・JERRYBEANS 講演ライブ

・誰でもふらっと来ていい居場所
「おかえり」

・不登校の子ども達の居場所
「にじっこ」

・体験サポート

バンド名は「JERRYBEANS」。
音楽を通して「一緒に考えよう」って伝えられたら…。